

第 4 4 回

「青森県農業経営研究協会賞」

受賞者業績

有限会社 悠久の郷

代表取締役 宮崎 悠 氏

(五所川原市大字水野尾)

令和 8 年 3 月

一般社団法人青森県農業経営研究協会

令和8年3月

監修及び編集者 第44回青森県農業経営研究協会賞選考委員会
委員長 澁谷 長 生
副委員長 高 谷 清 孝
地方独立行政法人青森県産業技術センター農林総合研究所
青森県西北農林水産事務所農業普及振興室

発 行 者 一般社団法人青森県農業経営研究協会
青森県黒石市田中 82-9
TEL 0172-53-7910 FAX 0172-40-4161

印 刷 所 ワタナベサービス株式会社
青森県青森市安方二丁目 17-3
TEL 017-777-1388 FAX 017-735-5982

目 次

I 受賞者業績 P 1

1 経営の発展経過と概要 (P 2)

2 経営の特徴 (P 6)

3 地域農業への貢献 (P 9)

4 今後の展望と課題 (P 9)

～ 写 真 ～ (P 13)

II 付属資料 P 14

表彰要領 (P 14)

選考委員名簿 (P 16)

歴代受賞者名 (P 17)

I 受賞者業績

第44回「青森県農業経営研究協会賞」受賞者

有限会社 悠久の郷

代表取締役 宮崎 悠

- ・住所 五所川原市大字水野尾
- ・設立年月日 平成10年1月16日
- ・代表の年齢 44歳／昭和56年7月生まれ



➤ 経営内容（令和6年）

農業労働力	・家族労働力（常勤役員）：3人（本人、義父、義母） ・雇用労働力（季節雇用）：3人（計540日／2月～12月）
経営耕地面積	・転換畑 66a ※うち施設 33a（園芸用ハウス8棟）
主な栽培品目等	・鉢ものの類 - シクラメン5号鉢 7.5a 7,301鉢 - シクラメン4号鉢 14.8a 20,377鉢 - ガーデンシクラメン3号ポット 5.8a 16,316ポット - ポットマム 4.9a 4,838鉢 ・花壇苗 25.5a 20.2万ポット ・野菜苗 7.5a 3.5万ポット

【業績】

- 1 鉢花生産における栽培から販売・マーケティングまでの仕組みを自ら確立
- 2 経費管理の徹底により安定した利益を確保し、持続可能な鉢花経営モデルを創出

1 経営の発展経過と概要

(1) 就農の経緯

「有限会社悠久の郷」の代表取締役である宮崎 悠氏は、昭和56年に群馬県の実業家の家庭に生まれ、平成12年に東北大学農学部へ進学した。在学中に一次産業への関心を深め、大学院農学研究科修士課程を修了後、平成20年より岩手県の牧場において畜産に従事した。平成23年に妻の実家がある五所川原市へ移住し、義父である小田桐美喜雄氏が経営する「有限会社悠久の郷」に就農。シクラメンを主体とした鉢ものの類の花き栽培に携わることとなった。

(2) 発展の経過

「有限会社悠久の郷」の花き栽培は、宮崎氏の義父である小田桐氏が、昭和50年に水田転作に対応するため237㎡(72坪)のパイプハウスで着手した花壇苗の栽培に始まる。昭和54年にはパイプハウス3棟(744㎡/225坪)を増設し、新品目としてシクラメンの栽培を開始した。その後、平成2年11月の強風により大部分のハウスが倒壊したことを受け、より強固な施設が必要と判断し、平成3年に3棟、平成6年に1棟の鉄骨ハウスを整備した。これにより合計4棟(1,980㎡/599坪)の施設を備えて規模を拡大した。

さらに、平成10年1月には、地域の中でもいち早く家族経営から法人経営に移行するとともに、パソコンによる簿記記帳を導入し、経営管理の改善に努めてきた。

平成23年には宮崎氏が「有限会社悠久の郷」に就農した。畜産からの転職であったことから、同年に青森県営農大学校の新規就農チャレンジスクールを受講し、技術の修得に努めた。平成24年にはホームセンターとの直接取引が始まり、就農2年目から宮崎氏が受注、経理、搬送等を一人で担い、直接取引部門の経営を任されるようになった。取引においては、店舗ごとの要望に応じた販売や売り場づくりを支援したほか、消費者と対面する機会を通じて消費者心理への理解を深めた。

平成27年には、全国的なシクラメン価格の低迷を機に品目構成を見直し、秋出荷の主体をシクラメン5号鉢から4号鉢へ転換するとともに、ポットマムを導入した。これらの取組により、価格低迷期においても再生産可能な収益を確保し、経営を維持することができた。

平成28年に宮崎氏が代表取締役に就任した。翌年の平成29年には種苗店との野菜苗の直接取引を開始し、現在では、野菜苗の生産量の8割を同店からの受注が占めている。また、令和元年には、2～3色の苗を1ポットに入れたオリジナル商品の花壇苗「多粒まきシリーズ」を開発し、ホームセンター向けに生産・販売している。

(3) 青森県の花き情勢と宮崎氏の対応

県内の花き栽培は、平成10年代前半をピークに減少傾向が続いている。平成27年から令和6年までに本県で新規就農した2,755人のうち、花き生産に参入したのは

9人（約0.3％）にとどまり、高齢化による生産者の減少が進んでいる。

シクラメン栽培も同様に、平成10年頃のピークを境に減少傾向にあり、平成27年に13戸あった県内のシクラメン栽培農家は、令和6年には9戸まで減少した。平均単価においても最盛期から大きく低下し、平成20年代以降は1鉢400円前後で推移している。なお、花壇苗類の平均単価は流通量に関係なく40～50円で推移している。

このような厳しい環境下で、宮崎氏は平成23年に新規就農し、義父が行っていたシクラメンと花壇苗の生産体系を基盤に、施設の面積や回転数を変えることなく、この10年余りで着実に売上を維持・向上させ、利益を法人に留保してきた。

（４）経営の概要

令和6年の農業労働力は、家族労働力（常勤役員）3人と雇用労働力（季節雇用）3人で構成されている。

経営内容は、園芸用ハウス8棟（33a）を活用し、春は花壇苗・野菜苗を県内へ、秋はシクラメン・ポットマムを首都圏へ出荷する体系である。

販売額（売上高）は3,682万円であり、粗収益から経費等を差し引いた所得（役員報酬控除前）は822万円となる。役員報酬を含めた所得率は22.3％で、県のシクラメン経営指標（20.6％）を上回っている。なお、令和4～6年の販売額は、おおむね3,500万円前後で推移しており、安定した水準にある。

〈表1〉主な取組経過

時 期	主な出来事	主な品目等
平成20年	・岩手県の牧場へ社員として就職	畜産業に従事
平成23年	・「有限会社悠久の郷」へ就農（30才） ・青森県営農大学校の新規就農チャレンジスクールを受講	シクラメン、花壇苗
平成24年	・ホームセンターと直接取引を開始 ・直接取引部門（受注、経理、搬送等）の経営を担当	花壇苗
平成27年	・全国的なシクラメン価格低迷を受けた品種構成の見直し ・秋出荷の主体をシクラメン5号鉢から4号鉢へ転換 ・新品目としてポットマムを導入	シクラメン4号鉢、ガーデンシクラメン3号ポット、ポットマム
平成28年	・法人代表に就任	—
平成29年	・種苗店と直接取引を開始	野菜苗
令和元年	・ホームセンター向けオリジナル商品「多粒まきシリーズ」を開発・販売	花壇苗

〈表2〉 家族と労働

(令和7年9月30日現在)

氏 名	続柄	生年月	年間農業 従事日数	年間兼業 従事日数	役割分担
宮 崎 悠	本人	S56.7	250日	—	経営全般、一般管理、 販売、経理
小田桐 美喜雄	義父	S24.4	250日	—	経営全般、一般管理
小田桐 絹 子	義母	S29.3	200日	—	一般管理

注1) 季節雇用(2月～12月) : 3人(40代女性・各180日)

注2) 宮崎氏の妻は他産業に就業

〈表3〉 経営耕地面積

(令和6年)

地 目	面 積			
	所有地	借入地	共有地	計
転 換 畑	66 a (うち施設33 a)	—	—	66 a (うち施設33 a)

〈表4〉 年間の栽培体系

	1月			2月			3月			4月			5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月		
	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下			
花壇苗	▽				▼			▽	▼																								土づくり			
野菜苗							▽		▽	▼		▼																								
シクラメン5号鉢							ポット育苗									鉢上げ																				
シクラメン4号鉢																鉢上げ																				
ポットマム																▽育苗																				

▽ 播種、育苗 ▼ 定植、鉢上げ

■ 出荷 ■ シェード(短日処理) / ● 加温



左：宮 崎 悠 氏
右：小田桐美喜雄 氏

〈表 5〉主な農作物の生産・販売状況

(令和 6 年・単位：a、鉢またはポット、円)

作物名 (出荷形態)	栽培 面積	数 量		仕 向 け 内 容		
		1 a 当 たり 収 量	総 量 ※注1)	販 売		
				数量	単価 ※注2)	販売額
春出荷						
花壇苗（ポット）	25.5	8,002	204,050	202,000	72	14,686,112
野菜苗（ポット）	7.5	4,714	35,360	35,000	176	6,169,797
計	33.0	—	—	—	—	20,855,909
秋出荷						
シクラメン5号鉢	7.5	983	7,370	7,301	598	4,369,959
シクラメン4号鉢	14.8	1,391	20,590	20,377	324	6,602,461
ガーデンシクラメン 3号ポット	5.8	2,842	16,480	16,316	154	2,519,088
ポットマム（鉢）	4.9	987	4,840	4,838	511	2,476,544
計	33.0	—	—	—	—	15,968,052
春秋計	66.0	—	—	—	—	36,823,961

注1) 総量は、栽培面積×1a 当たり収量を四捨五入して算出し、端数も四捨五入で調整（参考値）

注2) 単価は、販売額÷販売数量を計算し、1円未満を切り捨て（参考値）

〈表 6〉経営の推移

(単位：円)

区 分		令和 4 年	令和 5 年	令和 6 年
粗収益	販売額(売上高)	35,807,891	35,788,230	36,823,961
	雑収入	2,264	134,219	7,154
	棚卸	0	0	0
	計	35,810,155	35,922,449	36,831,115
所得（役員報酬控除前）		10,626,003	9,633,997	8,226,081
所得（税引後当期利益）		3,162,003	1,801,497	△849,919

注) 令和 6 年の所得（税引後当期利益）がマイナスとなった理由について

- ・鉄骨ハウス修繕に伴う特別損失の発生（747,375円）
- ・高温対策として遮光資材（スパッタリングシート）を購入（1,210,000円）
- ・役員借入金の返済や売上増加等を踏まえた役員報酬の増額（年間 9,076,000円）

2 経営の特徴

（１）品目構成の見直しによる経営基盤の強化

宮崎氏が就農した平成 23 年当時、「有限会社悠久の郷」における秋出荷の鉢もの類は、単価の高いシクラメン 5 号鉢が主体であった。しかし宮崎氏は、4 号鉢の方が市場ニーズや作業性の面で優位であり、将来的な経営の強みになると考え、品目ごとの経費計算に基づく収益性分析を行った。

その結果、4 号鉢は葉組み（葉を整える作業）の回数が少なく人件費を抑えられること、また栽培期間が気温の高い時期にあたるため燃料費を低減できることから、面積当たりの収益が 5 号鉢の約 2 倍となる点に着目した。

こうした分析を踏まえ、経営を任された平成27年には、秋出荷の品目構成をシクラメン 4 号鉢主体へと転換し、作型（栽培体系・出荷時期）を前進させるなど、体系的な改善を進めた。

さらに、青森県の夏季冷涼な気候を生かし、秋出荷面積の 1 割にポットマムを導入した。この品目は暖地では栽培が難しい初秋に出荷でき、加温を必要としないため、低コストで付加価値の高い品目として経営強化に寄与している。

〈表 7〉 秋出荷品目の構成割合

（単位：％）

品 目	平成26年以前 （見直し前）	平成27年以降 （見直し後）
シクラメン 5 号鉢	60	25
シクラメン 4 号鉢	20	50
ガーデンシクラメン 3 号ポット	20	15
ポットマム	—	10



シクラメンの出荷作業

（２）高品質な鉢ものの類の安定出荷

宮崎氏は、市場の産地リレー（産地が出荷時期を調整し、市場に切れ目なく供給する仕組み）に確実に組み入れてもらうため、毎年同じ時期に一定数量を安定した品質で出荷することを重視している。その実現に向け、求められる時期に高品質な鉢ものの類を揃えられるよう、作業計画の作成から生育管理までを徹底している。

品目ごとの栽培数は売れ残りが出ない範囲に抑え、出荷期間が長い品目については、播種や鉢上げ（育苗トレイ等から鉢へ植え替える作業）を複数回に分けることで、常に最も良い状態の製品を出荷できる体制を整えている。また、全施設で被覆資材や暖房機等の栽培環境を統一し、作物の入れ替えをスムーズに進めるとともに、出荷前の品質低下を防いでいる。

こうした取組の結果、首都圏３市場向けシクラメンの注文出荷割合は年々増加しており、令和７年には５号鉢５６％、４号鉢３５％、ガーデンシクラメン５４％に達し、安定供給と品質が評価され、主要市場との間に強固な信頼関係が築かれている。

（３）再生産可能な価格設定と販売戦略

宮崎氏は「高品質な鉢ものの類を手頃な価格で提供したい」という理念のもと、消費者にも市場にも受け入れられる価格水準を維持しつつ、翌年以降も安定して生産を継続できる経営を目指している。そのため、品目ごとに原料費、資材費、出荷経費、人件費等の変動費を詳細に把握し、概ね損益分岐点を上回る再生産可能な販売価格の下限を明確に設定している。

さらに、市場価格の動向を踏まえて販路を選択することで、設定単価以上での販売機会を確保し、価格変動リスクを抑えている。販売先は多岐にわたり、県内では青森市・弘前市・八戸市の花き市場や五所川原市の青果市場、ホームセンター、種苗店、県外では株式会社フラワーオークションジャパン（東京都中央卸売市場大田市場）、株式会社東京砧花き園芸市場、鴻巣花き株式会社（埼玉県）と取引している。これらの販路に対し、シクラメンは出荷量の８割、ポットマムはほぼ全量を首都圏３市場へ出荷している。

令和６年の平均単価はシクラメンが３０６円、ポットマムが５１１円である。特にポットマムは、大田市場の過去５年間（令和２～６年）の９～１０月平均価格３１２円を大きく上回り、約１６０％という高い評価を得ている。また、花壇苗の令和６年平均単価は７２円であり、花き生産状況調査に基づく本県の過去５年間（令和２～６年）の平均単価７２円と同水準を維持している。

（４）肥培管理による製品化率の向上

良品生産には、適切な肥培管理による初期生育の確保、移植時のスムーズな根張り、その後の安定した生育が不可欠であるとの考えから、宮崎氏は平成２５年より５年をかけて、品目別に自家配合土の施肥設計を見直した。その結果、窒素成分に敏感なシクラメンでは病害や生理障害の発生が減少した。

また、就農当初は生育不良などにより一定数の廃棄苗が発生していたが、肥培管理の改善により生育が安定し、現在では廃棄苗が大幅に減少している。これに伴い製品化率も向上し、シクラメンでは改善前の97%から99%へ、ポットマムは100%、苗ものの類も99%と高い水準を維持している。

さらに、ポットマムは高温下で開花遅延や花色の退色が見られ、近年シーズン始めは品薄傾向となっている。このような中、宮崎氏は高温となった令和7年においても、例年どおりの時期に高品質な製品を出荷している。これにより首都圏市場からの引き合いが強まったことを受け、令和8年からは増産を予定している。

（５）オリジナル商品「多粒まきシリーズ」の開発・販売

宮崎氏は、花壇苗の同一品目3色を1つのポットに植えたオリジナル商品「多粒まきシリーズ」を開発し、ホームセンター向けに契約栽培を行っている。また、ポットマムでも同様の商品を販売しており、いずれも好評で注文増につながっている。



ビオラ



マリーゴールド



ペチュニア



ナデシコ



ニチニチソウ

（６）生産と販売が相互に関係し合うシステム（総括）

前述の取組により、宮崎氏の経営では、高品質な鉢ものの類や苗ものを含む花き類を計画的に生産できる体制が整い、安定した販売と再生産可能な取引が実現している。こうした成果が市場をはじめとする販売先との信頼関係を強め、受注生産の増加につながっている。

さらに、栽培から販売・マーケティングまでの仕組みを自ら構築し、徹底した経費管理により安定した利益を確保していることから、生産と販売が互いに支え合う好循環の経営モデルが形成されている。

3 地域農業への貢献

宮崎氏は、津軽地域の花き栽培農家で組織される「津軽地区花卉生産者組合」の会員として研修会へ参加し、会員間の交流を通じて花き栽培技術の交換・研鑽に取り組んでいる。同組合が年に数回実施する視察研修では「有限会社悠久の郷」が毎回の巡回先となっており、出荷最盛期の施設見学や出荷動向に関する情報交換の場を提供するなど、地域の花き生産に対する技術向上と情報共有に寄与している。

さらに、中南地域の特花生産農家とも連携し、生産現場の課題や取組を共有しながら互いに技術の向上を図っている。

加えて、平成27年頃からは学校教育サポーターとして、五所川原市立五所川原第一中学校での職業講話や職業体験の受け入れ、青森県立弘前高等技術専門校の現地実習への協力を通して、若い世代に農業や花き栽培の魅力を伝え、関心を持つきっかけづくりにも取り組んできた。これらの活動は新型コロナウイルス感染症の影響により一時中断しているが、依頼に応じて再開したいと考えている。

なお、生産する花壇苗のうち約1割は、町内会や農村整備を担う保全会の花壇向けに販売しており、地域の環境美化にも一役買っている。

4 今後の展望と課題

（1）夏季高温化傾向による需要変化への対応

宮崎氏は、施設の面積や回転数を維持しつつ、産地動向に応じて品目や作型を柔軟に見直し、消費者に手頃な価格で高品質な製品を提供する経営を目指している。

近年は全国的に高温障害が多発し、シクラメンをはじめとする主要品目の生産に影響が出ている。農林水産省「作況調査（花き）令和6年産花き生産出荷統計（確報）」によると、令和6年産シクラメンは前年に比べ収穫面積が1ha（1%）減少し、出荷量も80万鉢（6%）減少した。これは収穫面積の減少に加え、夏季の高温の影響による生育不良が要因とされている。

また、他の品目でも異常高温やゲリラ豪雨の影響により、従来の栽培品目や作型では対応が難しい状況が生じている。本県においても、令和7年には夏季の異常高温により、シクラメンの花芽不足や生育遅延が発生し、切り花の輪ギクでは開花遅延や花色の退色、奇形花の発生による品質低下が確認されている。

こうした状況を踏まえ、宮崎氏は、夏季冷涼な本県の地の利を生かした品目や作型の導入に加え、高温環境下での耐暑性向上に寄与するとされるバイオスティミュラント（農作物や土壌が元々持つ機能を補助する資材）の試用や細霧冷房の導入検討など、高温対策に向けた準備を進めている。

（2）持続的な経営発展のための人材の確保

経営の発展にはスタッフの存在が不可欠であることから、有給休暇、労災保険、失業保険などの雇用条件や福利厚生を整備し、勤務日や勤務時間についてもスタッ

フの都合に合わせて調整できる柔軟な勤務体系としている。

家族労働力である義父と義母が高齢となっているため、将来を見据えて10年以上前から1名を雇用し、5年前と3年前にそれぞれ1名ずつ増員した。現在は、40代の女性3名が毎年2月から12月まで季節雇用として従事している。

今後は、冬期間に対応した作型の検討と作業工程の改善を進めるとともに、安定した労働時間や賃金の確保、働きやすい環境づくりにも取り組み、人材の確保と定着につなげていきたいと考えている。

（３）自然災害リスクへの備え

近年の気象変動を踏まえ、生産面・施設面・資金面など多角的にリスクを想定し、災害時にも経営を継続できるよう事前の対応策を整えるとともに、農業版事業継続計画（BCP）を作成している。

しかし、「有限会社悠久の郷」では減価償却が終わった施設が大半を占め、鉄骨ハウスについても今後10年以上は張り替えの必要がないフッ素系の被覆資材を使用していることから、現状は大きな修繕リスクは少ない。

ただし、それ以外の設備については修繕が必要となる可能性があるため、自然災害への備えに加え、施設修繕費を計画的に積み立てていく考えである。

（４）花き栽培の魅力発信と次世代への継承

鉢花生産農家は全国的に減少傾向にあることから自らが手本となり、花き栽培の魅力を発信していくことが重要と考えている。現在中断している職業体験や実習についても、再開を目指したい意向である。

さらに、自身の子どもたちも休日には作業に関わっており、その取組を支えることで、次世代が農業に関心を持つきっかけになると期待している。



シクラメン



ポットマム（各種）

〈表 8〉農機具の所有状況

(単位：台、円)

No.	種 類	規格・能力	台数	取得年	取得価額
1	暖房機	37.2kW 58.1kW 87.2kW	1 3 4	S63 H4・H6 H7・H13・H17	4,422,741
2	井戸	100ℓ/min	1	H13	525,000
3	井戸ポンプ	80ℓ/min	1	H30	321,384
4	動力噴霧器	25ℓ/min 35ℓ/min	1 1	H11 R5	500,000
5	床土ミキサー	1,500ℓ	1	H6	873,786
6	トラック	2t	1	R2	3,825,570
7	バン	2,750cc	1	H30	3,435,916
8	ホイールローダ	22PS	1	H4	2,678,000
9	トラクター	32PS	1	H21	3,350,000
10	発電機	25kVA	1	H23	1,349,250
11	静電噴霧器	空気圧力 2.8～3.8kgf/cm ² 噴霧量 13ℓ/時	1	H13	787,500
12	除湿器	5.2ℓ/h	1	H10	504,000
13	除雪機	トラクターアタッチメント	1	H13	525,000

〈表 9〉施設・建物の所有状況

(単位：円)

No.	種 類	構造	規模	取得年	取得価額
1	フッ素系 ビニールハウス	鉄骨	1,980m ² (4棟)	H3 (3棟) H6 (1棟)	26,297,244
2	ビニールハウス	パイプ	825m ² (2棟)	H11	8,783,250
3	ビニールハウス	パイプ	495m ² (2棟)	S58	1,050,000
4	ビニールハウス (倉庫用)	パイプ	330m ² (1棟)	S63	983,600

〈表10〉 経営収支（令和6年）

費 目	経営全体（円）	備 考
収 入		
粗 収 益（売上高）	36,823,961	
雑収入・貸倒引当金戻入額	10,254	
収入合計	36,834,215	
経 営 費		
種苗費	6,826,623	
肥料費	699,828	
農薬費	277,235	
動力光熱費	2,222,759	
諸材料費	5,528,068	
農具費	372,196	
修繕費	840,113	
車両費	862,108	
減価償却費（建物）	5,249	
減価償却費（機械）	30,508	
減価償却費（車両）	330,529	
雇用費	2,852,710	
法定福利費	893,280	
荷造り運賃手数料	2,172,063	
委託販売手数料	2,061,357	
旅費交通費	144,390	
事務消耗品費	26,057	
通信費	210,845	
新聞図書費	46,800	
支払保険料	180,360	
租税公課	938,200	
支払手数料	118,471	
貸倒引当金	1,900	
雑費	323,675	
法人税住民税	80,075	
期首材料棚卸高	7,945,311	
期末材料棚卸高	△7,382,576	
経営費計	28,608,134	
所 得（役員報酬控除前）	8,226,081	
役員報酬	9,076,000	
所 得（税引後当期利益）	△849,919	

注）令和6年の税引後当期利益がマイナスとなったのは、鉄骨ハウス修繕に伴う特別損失の計上や高温対策資材の購入、役員報酬の増額等によるものである。



シクラメンの出荷作業



出荷間近の花壇苗



冬期間の育苗風景



用土配合作業

Ⅱ 付属資料

令和 7 年度 第 4 4 回青森県農業経営研究協会賞

【表彰要領】

1 趣旨

青森県内に居住する農業者（個人または団体）で、農業経営の改善に自ら取り組み、顕著な業績をあげた者を表彰することで、本県農業の発展に資することを目的とする。

2 表彰の名称

本賞は、「青森県農業経営研究協会賞」（以下、「協会賞」という。）と称する。

3 主催

「協会賞」の選考及び表彰は、一般社団法人青森県農業経営研究協会（以下、協会という。）が主催する。

4 表彰候補者の推薦等の手続き

- （１）協会は、県内の市町村長、市町村農業委員会長、農業協同組合長及び農林水産事務所長（以下「推薦機関の長」という。）に対して、候補者の推薦を依頼する。
- （２）推薦機関の長は、管内に適任と思われる候補者がいる場合、【様式 1】推薦書及び【様式 2】概況調査票を添えて協会へ提出する。

提出期限 令和 7 年 9 月 3 0 日（火）必着

5 選考委員会の設置

- （１）協会は、理事長が任命する選考委員による選考委員会を設置する。
- （２）選考委員長及び副委員長は、委員の中から選定する。

6 表彰候補者の選考及び決定

書類審査及び現地調査を経て、令和 7 年 1 2 月までに選考委員会が表彰候補者を選定し、理事長が決定する。なお、選考委員会及び現地調査時の説明は、推薦機関が行う。

7 選考の基準

以下のいずれかに該当し、地域農業の中核的役割を担いながら模範的な農業経営を実践している、または6次産業化に積極的に取り組み経営改善に成果をあげている個人または団体とする。

- (1) 高い改善意欲と計画性・発展性を有すること
- (2) 経営において創意工夫があり、模範となること
- (3) 地域農業の振興に寄与していること
- (4) 青色申告や総会資料等により収支計算が明確に示されていること

8 表彰の時期及び方法

- (1) 令和8年3月に開催予定の表彰式にて表彰式を行う。
- (2) 表彰内容：表彰状の授与、副賞（楯及び賞金10万円）
- (3) 受賞者の業績は、関係機関、ホームページにおいて広く紹介する。

9 表彰の対象外

以下に該当する者は、対象外とする。

- (1) 全国規模の中央賞をすでに受賞している者
※朝日農業賞、全国農業コンクール、農事功労者表彰、日本農業賞等
- (2) 田中稔賞、木村甚彌賞の受賞者
- (3) 叙勲、褒章、県褒章、東奥賞の受賞者
- (4) 令和7年度に他の県規模の表彰事業に応募している者

10 その他

この要領に定めのない事項は、理事長が別途定める。

青森県農業経営研究協会賞

【選考委員名簿】

(令和7年度)

氏 名	所 属 ・ 職 名
澁谷 長 生 (委員長)	国立大学法人弘前大学・名誉教授
高谷 清 孝 (副委員長)	青森県農業信用基金協会・会長理事
相 場 仁	全国農業協同組合連合会青森県本部・営農部次長
飯 田 敏 夫	一般社団法人青森県農業会議・事務局長兼専務理事
木 立 純 一	青森県農業経営者協会・会長
成 田 真 樹	青森県農林水産部農林水産政策課・総括主幹 (農業改良普及グループ・グループマネージャー)
野 沢 智 裕	地方独立行政法人青森県産業技術センター農林総合研究所・所長

注) 委員名簿は、令和7年11月に開催した「選考委員会」開催時の役職とする。

青森県農業経営研究協会賞

【歴代受賞者名】

回	年度	受 賞 者	(市町村名／部門名)
1	S57	笠 井 実	(五所川原市／水稻)
2	S58	宮 本 正 男	(十和田市／野菜)
3	S59	高 橋 勝 美	(三沢市／酪農)
4	S60	(該当なし)	
5	S61	境 谷 博 顯	(五所川原市／水稻主体)
6	S62	笹木営農集団組合	(森田村／水稻組織)
7	S63	中市水稻営農組合	(倉石村／水稻組織)
8	H 1	木 村 徳 英	(黒石市／りんご)
9	H 2	谷 川 強	(平賀町／野菜)
10	H 3	木 立 誠	(青森市／水稻・施設野菜)
11	H 4	原 田 僚	(金木町／りんご)
12	H 5	渋 川 良 一	(黒石市／水稻・施設野菜)
13	H 6	斎 藤 靖 彦	(弘前市／施設野菜)
	H 6	金 子 春 雄	(七戸町／肉用牛)
14	H 7	大 平 廣	(黒石市／りんご)
	H 7	野田頭 俊 一	(東北町／野菜)
15	H 8	寺 牛 伸 一	(三戸町／施設野菜)
16	H 9	相 川 忠 満	(車力町／野菜)
	H 9	梅 木 修 司	(六ヶ所村／酪農)
	H 9	神 晴 幸	(鰯ヶ沢町／りんご)
17	H10	原 英 輔	(むつ市／酪農)
	H10	笹 森 秀 郎	(下田町／野菜)
18	H11	石 黒 司	(黒石市／野菜)
19	H12	木 立 純 一	(平内町／酪農)
	H12	越 後 政 博	(三戸町／工芸作物)
20	H13	石 田 嘉 昭	(弘前市／野菜)
21	H14	津 川 登	(黒石市／りんご・水稻複合)
22	H15	岡 部 敏 雄	(六ヶ所村／酪農)
23	H16	秋田谷 長一郎	(市浦村／水稻・畑作、野菜複合)
24	H17	勝 山 陽 一	(むつ市／野菜)
25	H18	川 村 公 夫	(弘前市／野菜)
26	H19	(該当なし)	
27	H20	長 尾 信 彦	(五所川原市／花き・水稻・施設野菜)
28	H21	高 村 國 昭	(五戸町／野菜)
29	H22	長谷川自然牧場 長谷川光司・洋子	(鰯ヶ沢町／養豚)
30	H23	(該当なし)	

回	年度	受 賞 者	(市町村名／部門名)
31	H24	アグリネット 21	(東北町／野菜)
32	H25	大 湯 知 巳	(平川市／りんご)
33	H26	我 満 智	(青森市／施設野菜)
34	H27	宮 古 久 光	(三沢市／野菜)
35	H28	青森観光りんご園 川村忠則	(青森市／果樹・観光農業)
36	H29	間 山 直 浩	(青森市／りんご)
37	H30	寺 澤 和 夫	(七戸町／野菜)
38	R 1	千 葉 晋	(むつ市／繁殖牛)
39	R 2	おとべ農産合同会社 乙部英夫	(東北町／野菜)
40	R 3	沼 畑 俊 一	(南部町／野菜・果樹・ブロイラー)
41	R 4	黒 滝 彰	(つがる市／水稻・野菜・加工品)
42	R 5	(該当なし)	
43	R 6	株式会社釈迦のりんご園 工藤秀明	(平川市／りんご)
44	R 7	有限会社悠久の郷 宮崎 悠	(五所川原市／花き)

注) 市町村名及び団体名は受賞時のものとする。

当協会ホームページも併せて御覧ください。

<https://www.aomorinokeiken.com/>



